

日本とヨーロッパ

向井潤吉の 草木と石の民家



〈パリの風景〉1959年

〈山峡立春〉1975年



95年4月1日[土]—6月25日[日]

開館時間 午前10時—午後6時(入館は5時30分まで)

休館日 毎週月曜日(休日にあたるときは翌日)

観覧料 一般200円(160円) 大高生500円(320円) 中小生100円(80円)

(内は20名以上の団体料金 65歳以上の方160円)

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館

〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1 TEL 03-5450-9581

向井潤吉先生は昭和20年以降、かつては日本の田園風景を象徴していた茅葺き屋根の民家を、全国津々浦々を旅して描き続けてきました。

日本の伝統的な建築である茅葺き屋根の民家は、各地の気候や生活習慣、また地場産業などによって、それぞれの地方に相応しい構造となって行き、やがて各地方独特の形状へと発展してきたのです。

しかし、戦後の高度経済成長の中では産業構造が大きく様変わりし、戦前にもまして私たちの生活様式は著しく欧米化しました。かつての日本の住宅は、樹木や草などの自然の恵みを用いて建てられていましたが、急速な生活様式の変化と、生活設備の充実にしたがって、住宅には合理性と耐久性が優先して求められ、またたくまに日本の風景は変貌していきました。

このたびの展覧会では日本の茅葺き屋根の民家を描いた作品と併せて、ヨーロッパに取材した石造りの民家をスケッチした作品の数々をご紹介します。これらの作品は、向井先生が日本の民家をモチーフとする創作に取り組まれてからすでに十数年が経過した、昭和34年から35年(1959-60)にかけて滞欧し、制作されたものです。この当時の日本は、まさに高度経済成長の真っ只中にあり、こうした時期に向井先生が描かれたヨーロッパの石造りの民家は、その目に一体どのように映ったのでしょうか。

ヨーロッパにおける石の建築は、長い歴史の中で街の景観を形成してきました。石もまた草木と同様に自然から恵まれた素材ですが、退化したり変形しにくいその特性を生かした建築は、その建築技術をはじめとしたひとつの文化の集積であり、各地方独特に形成された建築様式には、それぞれの風土に生きる人々の営みが深くかかわっています。

各地方の風土に相応しい建築が長い歳月のうちに培われてきたこと自体は、日本とヨーロッパとの間に隔たりはありません。しかし、この数十年間に生活そのものが著しく変化してきた日本では、たんに茅葺き屋根の民家が失われただけでなく、借景や生け花などを通して、生活の中で自然に親しみ、身のまわりの自然を大切にしてきた本来の日本人の自然観も徐々に薄らいできたのかも知れません。

向井先生が長年にわたってモチーフとされてきた茅葺き屋根の民家と、歴史を経ても今なお生活の場となっているヨーロッパの石造りの民家をモチーフとした作品を同時にご覧いただきながら、私たちの日常と密接に関係する民家、風土、自然、生活など、いくつかの言葉が想起されればと思います。



《プロバンの屋並》1958年



《山家雪意(宮城県刈田郡七ヶ宿町間字横川)》1961年

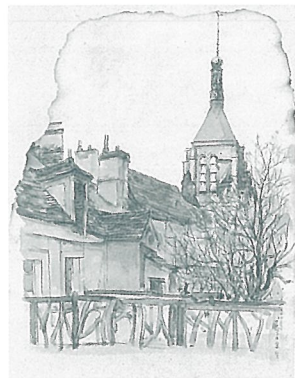


《沢内村六月(岩手県和賀郡沢内村)》1988年



《白馬岳の見える丘》制作年代不詳

向井潤吉の 草木と石の民家



《ヨーロッパ風景(プロバンの宿にて)》1960年



《ヨーロッパ風景(キオッジャ)》1960年

●最寄り交通機関のご案内

東急新玉川線【駒沢大学】駅西口 下車/徒歩10分

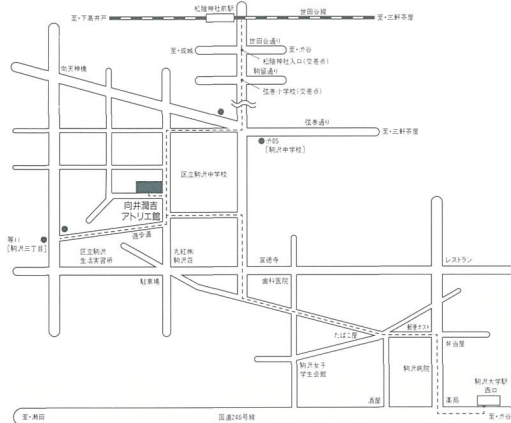
東急世田谷線【松陰神社前】駅 下車/徒歩17分

東急バス (渋05) 渋谷～弦巻営業所 【駒沢中学校】 停留所下車/徒歩3分

東急バス (等11) 祖師谷折返所～等々力 【駒沢三丁目】 停留所下車/徒歩3分

東急バス (渋11) 渋谷～田園調布 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分

東急バス (渋13) 渋谷～砧本村 【駒沢大学駅前】 停留所下車/徒歩10分



世田谷美術館分館
向井潤吉アトリエ館
〒154 東京都世田谷区弦巻2-5-1
TEL 03-5450-9581